

# バスケットボールにおける攻撃の全体像を示す指導法と運用 2

——実践例からの事例を元にして——

松 本 真 埼玉大学教育学部保健体育講座

キーワード：攻撃の全体像、運動形式、実践

## 1. はじめに

本論は、先の拙者の「バスケットボールにおける攻撃の全体像を示す指導法と運用 ～実践からの事例を元にして～（教育科学）『埼玉大学紀要（教育学部）』第61巻 第2号 pp.15-26.」の続編として書かれている。先の論文において、バスケットボールを代表とするボール運動のゴール型、中でも攻守混合型の球技（バスケットボール、サッカー、ハンドボール等）の指導の難しさについて言及した。特に、現場の多く教員が困っているボール非保持者の動きについて、何故、そのような困難がおきてくるのかということに触れながら、攻撃の全体像を型として示すことによって、ある程度解決するのではないかという示唆を、実践でのフィードバックから示した。本論では、先の論文で紹介した攻撃の全体像（側線のボール運びから）とは異なる攻撃の型、特に、ボール運びを異なるやり方で行う全体像を紹介し、実践例からの注意点等を列挙する。また、側線のボール運びとの関連にも言及する。そして、現場の教員が本論を読んで、自らの実践の参考になることを目指している。

## 2. ボール運動における思考・判断

平成23年度に小学校より全面実施されている現行の学習指導要領の元でボール運動を行う際、評価の観点として「思考・判断」について言及する必要があります。しかし、ボール運動についての「思考・判断」についての一般的な見解には難しさがあると考えられます。そこで、何が難しさを感じさせているのかという問題点を明らかにすることが本項の目的である。マスは、学習指導要領の改訂の趣旨、特に小学校に焦点をあててながら「思考・判断」をどのように解釈しているのかを確認することから始めたい。

### 2.1. 小学校学習指導要領より

小学校学習指導要領解説の体育編（平成20年6月）において、OECD（経済協力開発機構）のPISA調査など各種の調査における、我が国の児童生徒について、

- ①思考力・判断力・表現力等を当読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題。
- ②読解力で成績分布の分散が拡大しており、その背景には家庭での学習時間などの学習意欲、学習習慣・生活習慣に課題。
- ③自分への地震の欠如や水からの将来への不安、体力の低下といった課題。

として、世界的な基準の中から3つの課題を挙げている。この課題は、世界の教育立国を目指すためのものである。その中に、今回問題となっている思考力・判断力という用語が見える。

さらに、教育基本法の改正、学校教育法改正が行われ、知・徳・体のバランス（教育基本法第2条第1号）とともに、基礎的・基本的な知識・技能、思考力・判断力・表現力等及び学習意欲を重視し（学校教育法第30条第2項）、学校教育においてはこれらを調和的にはぐくむことが必要である旨が法律上規定されたところである。このようなことをふまえ、

- ①改正教育基本法等を踏まえた学習指導要領改訂
- ②「生きる力」という理念の共有
- ③基礎的・基本的な知識・技能の習得
- ④思考力・判断力・表現力等の習得
- ⑤確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保
- ⑥学習意欲の向上や学習習慣の確立
- ⑦豊かな心と健やかな体の育成のための指導の充実

を基本的な考え方として、各学校段階や各教科等にわたる学習指導要領の改善の方向性が示されたとある。

この七項目の中で、③の基礎的・基本的な知識・技能は、例えば、小学校低・中学年では体験的な理解や繰り返し学習を重視するなど、発達の段階に応じて徹底して習得させ、学習の基盤を構築していくことが大切との提言がなされた。そして、この基盤の上に、④の思考力・判断力・表現力等をはぐくむために、観察・実験、レポートの作成、論述など知識・技能の活用を図る学習活動を発達の段階に応じて充実させるとともに、これらの学習活動の基礎となる言語化に関する能力の育成のために、小学校低・中学年の国語科において音読・暗唱、感じの読み書きなど基本的な力を定着させた上で、各教科等において、記録、要約、説明、論述といった学習活動に取り組む必要があると指摘した。

このような、改訂の趣旨が体育という実技科目において、どのように解釈されているのか、概観する。

## 2.2. 体育科の改訂

小学校学習指導要領解説の体育での改善の基本方針の（イ）で、「体を動かすことが、身体能力を身につけるとともに、情緒面や知的な発達を促し、集団的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成することや、筋道を立てて練習や作戦を考え、改善の方法などを互いに話し合う活動等を通じて論理的思考力をはぐくむことにも資することを踏まえ、それぞれの運動が有する特性や魅力に応じて、基礎的な身体能力や知識を身に付け、生涯にわたって運動に親しむことができるように、発達の段階のまとまりを考慮し、指導内容を整理し体系化を図る。」とある。

さらに、思考・判断の基盤となるのが、言語であるとの認識から学習の中でいかに言語活動を充実させるのかということにポイントが置かれるようになった。このことについては、「言語活動の充実に関する指導事例集（小学校版）」の第三章 言語活動を充実させる指導と事例〈体育〉において、言及されている。以下に主要な部分を抜粋する。

コミュニケーション能力を育成したり、論理的思考力を育んだりする観点から、ゲームや練習などにおける励ましや協力をすること、及び練習方法や作戦を考えたり、成果を振り返ったりするために話し合う活動などを充実する。また、健康・安全に関する知識を活用する学習活動を充実する。

運動領域では、他者とのコミュニケーション能力を育成するため、身体表現や、ゲーム場面での意思疎通などの集団的活動で互いに励まし合ったり、相手チームの健闘を称えたりして、協力して学び合う活動を、保健領域では、実習や実験等を実施した際の観察や体験を基に話し合いを行い、考察し、身近な生活における課題や解決の方法を見付けたり、選んだりするなどの活動を充実する。

運動領域では、論理的思考力を育成するため、資料を基に練習方法や作成を考えて教え合ったり、その成果や課題について話あたり、学習カードにまとめたりする活動を、保健領域では、健康に関わる概念や原則を基に、自分の生活と比較したり、身近な生活との関係を見付けたりしたことを説明するなどの活動を重視する。

そもそも、思考・判断という評価の要因は、体育以外の科目を念頭におかれていることが前提としてある。そのため、体育において、思考・判断をどのように取り入れるのかということが難しい問題となっていることが伺えるさらに、学習指導要領では、思考・判断を教育するためには、思考・判断するための基礎を固めなければならない。そのための、基礎基本の充実を図り、そこに言語活動が重要な役割を果たしているとしている。

しかし、体育でもボール運動の領域では、思考・判断については、筋道をたてて練習や作戦を考え、改善の方法などを互いに話し合う活動等を通じて論理的思考力をはぐくむ、等とある。そして、この考えを具現化するのがボール運動、集団スポーツであるとの認識が一般的になっている。

### 2.3. 体育において、基礎基本と思考・判断について

改定後の学習指導要領では、小学校で学ぶべき内容を運動領域として下記の表のように示している。

学年	1・2	3・4	5・6
領域	体づくり運動		
	器械・器具を使つての運動遊び	器械運動	
	走・跳の運動遊び	走・跳の運動	陸上運動
	水遊び	浮く・泳ぐ運動	水泳
	ゲーム		ボール運動
	表現リズム遊び	表現運動	
	保健		

この表で示す通り、運動種目ごとに、学年があがるごとに、基礎から応用へ移行しているのがわかる。それと同時に、各運動領域の特性により、体づくり運動、器械運動、陸上運動は、運動の基礎基本であるという認識があり、応用として、ゲーム、ボール運動があるという認識の側面もある。

このことが明確になっているのが先に触れた言語活動の充実に関する指導事例集である。そのなかで、「コミュニケーション能力を育成したり、論理的思考力を育んだりする観点から、ゲームや練習などにおける励ましや協力をする、及び練習方法や作戦を考えたり、成果を振り返ったりするために話し合う活動などを充実する」という表記しているところに出ている。今回の学習指導要領の改訂で、体育で扱う各運動領域ごとに学年があがるごとに、基礎基本から応用へというよりは、運動領域の中でこの領域は基礎基本、この領域は応用的な側面を担う思考・判断を担当するということになっている。つまり、指導要領全体の構成で指摘される基礎基本を学び、それを基盤に応用、つまり、思考・判断へとつながるといった基本的な認識とは、異なる構造とプロセスを持っているといえる。

ゲーム領域から連なるボール運動の領域には、基本となる運動があるというよりは、体育の中での思考・判断を育む領域として認識されているようである。つまり、運動の基礎・基本とは、運動領域の「体づくり運動」「器械・器具を使つての運動遊び～器械運動」、「走・跳の運動遊び～走・跳の運動～陸上運動」が担うと考えられている。そして、思考・判断を「ゲーム～ボール運動」が担うとなっている、という構造がこの表の中に隠されていると考えられる。

この背景には、ボール運動、特にバスケットボールのような集団球技に対する誤った認識がある。この手のボール運動は、走る、止まる、跳ぶ、ボールを投げる、ボールをとる、等の個人的な基本技術が出来るといったら、それを組み合わせることによって成立するという認識である。そのため、個々の技術がある程度できたら、チーム戦術等は、その組み合わせだけで成立すると考えている。そして、その組み合わせの部分にこそ、思考・判断が大いになされると考えている。このようなボール運動の認識では、実際にはチーム戦術などがなかなか成立しないことは、これまでの実践例から明白である（それゆえ、その方法論について数多く論じられている）。

そして、現行の学習指導要領においては、ボール運動で、作戦などを作り出すことで思考・判断をさせるということに特化し、ボール運動での、特に集団球技におけるチーム戦術としての基礎基本に目が向かなくなってしまうと考えられる。ボール運動に対する間違った認識が間違った方向に導き、結果としてボール運動の指導を困難にしていると考えられる。

ボール運動における思考・判断の考え方を根本から変える必要がある。先の拙者の論文で、このことについて触れているので、ここでは詳細には触れないが、少なくとも、バスケットボールのような球技の戦術的な基礎は、ゲーム自体の全体像をつかませることであり、その際、攻撃の全体像を明確にして、それを基礎基本とすることである。そして、本論ではその趣旨に沿って以降の新たな攻撃の全体像について議論を進める。

### 3. コートの形状の変化について

バスケットボールの国際競技規則「Official Basketball Rule 2010」が2011年（平成23年）4月1日から採用され、コートの形状が変更になった。主たる変更点としては、3ポイントラインが約50cm下がったことと、制限区域の形状が、台形から長方形に変更になったことである。競技の世界では、この変更は戦術的な観点に少なからず影響を与えている。しかし、バスケットボールの競技特性を根幹から変更するまでには至っていない。少なくとも戦術的な側面に大きな影響を与えているとは、考えられない。そのため、学校の授業レベルにおいても影響を考慮する必要はないと考える。

#### 4.1. 新たな全体像の提示

先の拙者の論文でも示した根拠により、戦術的な基本として、攻撃の全体像を提示する重要性を示した。この全体像はボール運動の思考・判断をするための基礎基本となるものである。つまり、思考・判断するための前段階の提示である。このことは、小学校低・中学年のゲームでは提示されない、もしくは提示されても理解することが困難な知識であると考えられる。ゲームでは、どちらかというとゲームを成立させるためのルールを守るという段階にとどまると考えられるからである。これは、ゲームを成立させるために大変重要なプロセスで、ゴール型と言われる攻守が瞬時に変わるような種類のボール運動で

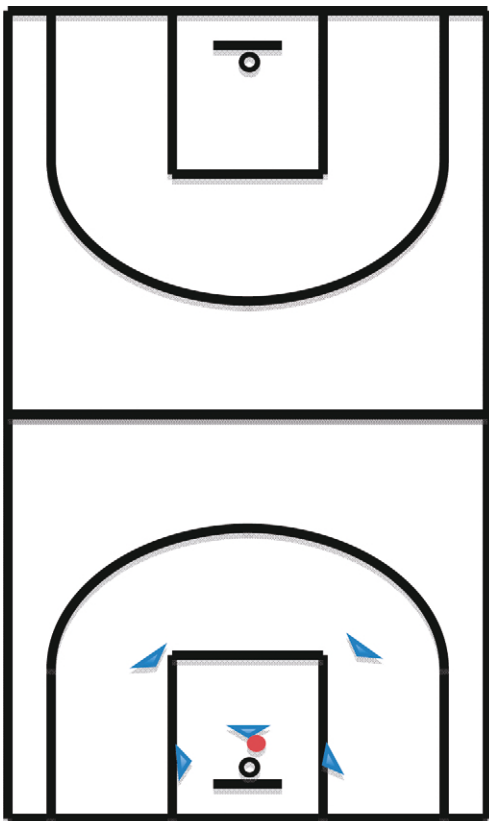


図1

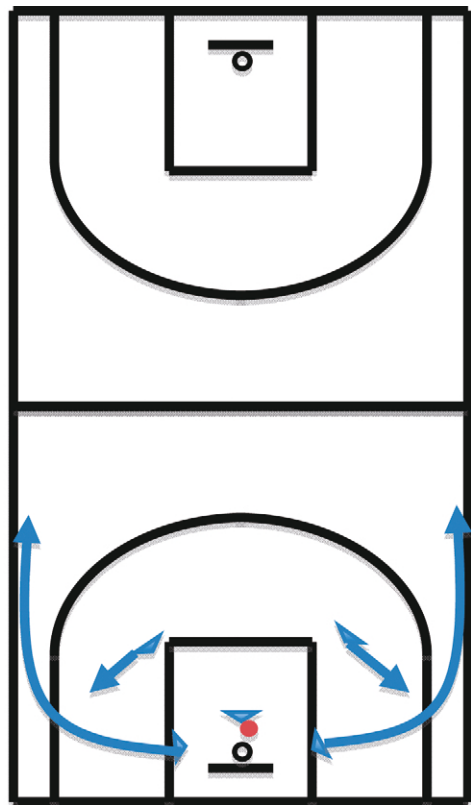


図2

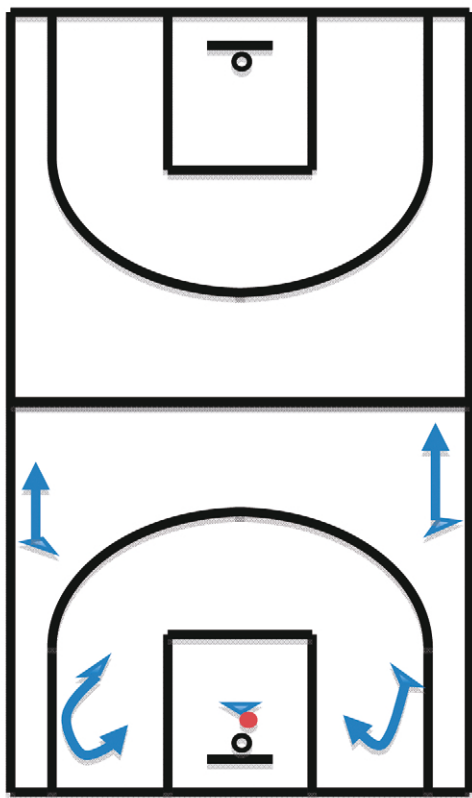


図3

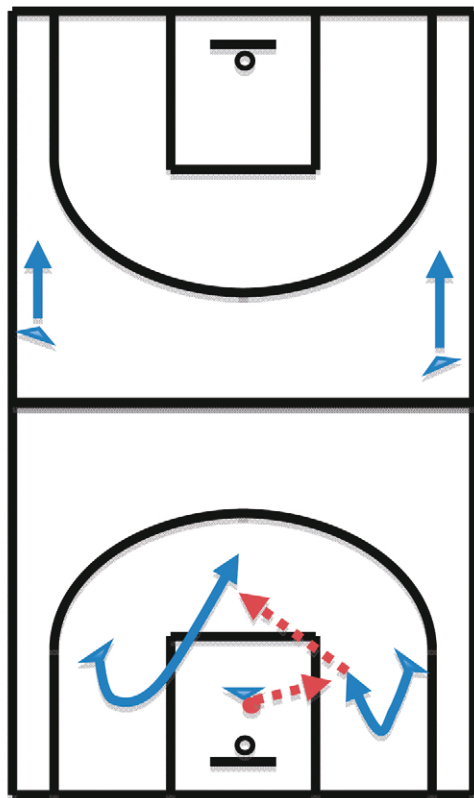


図4

は、特に重要である。その上で、高学年になって、戦術的な要素が入ってきたときに、戦術的な部分を成立させるための基礎基本を作らなければならない。そこで、その基礎基本として提案するのが攻撃の全体像の提示である。これについては、先の論文で側線のボール運びからの攻撃の全体像を示しているが、本論文では、別の形式の攻撃の全体像を提示する。

図1のように、5人がポジションをとる。ハイポストにいる二人がガードと言われボール運びを担当する。それ以外は、リバウンド、そして速攻に先行して走ることを担当する。

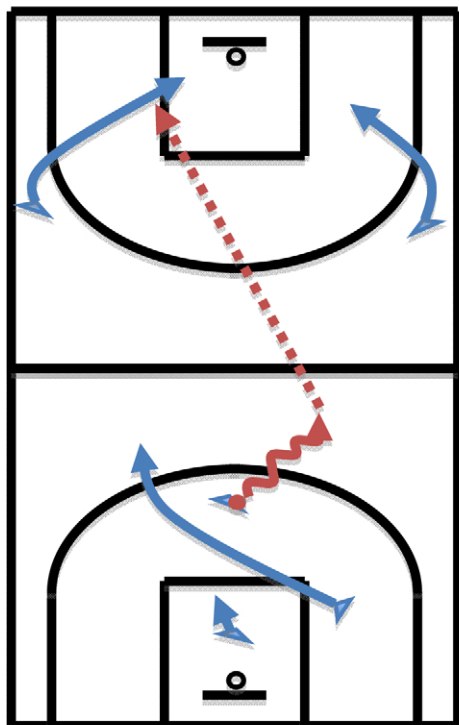


図5

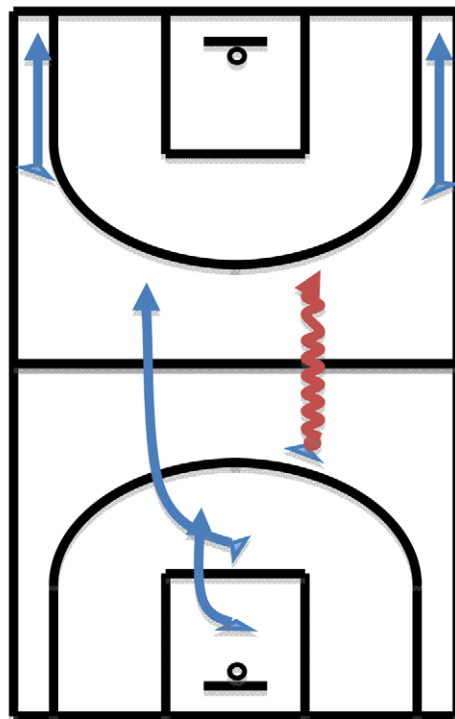


図6

図2のように下の3人の内の一人がリバウンドを取るところから始める。そのときに、残りの二人は、サイドライン方向へ開き（センターライン方向へ斜めに走り出すのではなく、エンドラインとほぼ平行に走り、サイドラインへいち早く到達するように）、そのままサイドラインを踏むようにしてコーナーへ

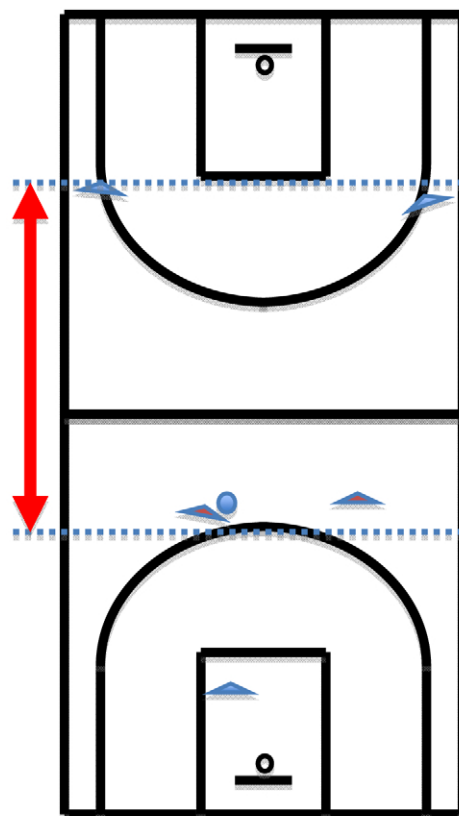


図7

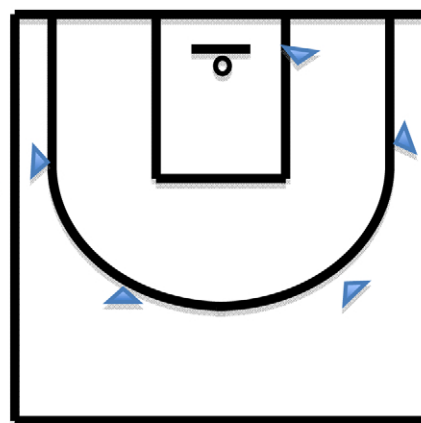


図8

走る。ガードは、攻撃する方向ではなく、逆走するような形で外側に開くように走り、リバウンドを取った人にとって取りやすい場所へ移動する（パスコースづくり）。それからガードは、図3のように円を描くようにリバウンドを取った人に寄っていくような動きをする（スクエアカット）。

そして図4のように、リバウンドをとった人にとって、パスを投げやすいガードにパスする。もう一人のガードが、パスを受けたガードからパスを受け、コート中央へ行く。そこで、先にサイドラインを走った二人と共に、三線を作るようにする。

そこから、図5のように、レイアップシュートへ持って行く。そして、リバウンドとった人は、最後にハーフコートに入る。この人が一生懸命走ってしまうと全体のバランスが崩れてしまう。コートを広く使うという観点からも攻撃の人間が、左右（サイドラインからサイドラインまで）と前後（ボール保持者を追いついて、先頭を走る人から、最後尾のリバウンドをとった人まで）をなるべく広くとるようにすることが大切である。特に、攻撃の最初のチャンスであるファーストブレイクの際には大切なポイントである。逆の観点で考えると、ボール保持者が先行して一人で走るの、完全に抜けている場合以外は、全く攻撃にならない。また、ボール保持者の前を残りの4人が横一列になって走っても攻撃が難しくなる。その意味では、攻撃の際のボール運びタイミングと図7のようなフロアバランスを覚えるのに適切である。

さて、図5のように3線の速攻の形から簡単なランニングシュートへと持っていければ、理想的な形である。しかし、このように上手くいくことは実際には少なくその際の展開も頭にいれる必要がある。相手に上手く守られ速攻が出ないと判断したら、サイドを走っている人は、図6のようにそのままコーナーへと動き、ガードの二人はそのまま2ガードのポジションへと動き4アウトのポジションを作る。最後に遅れてきたリバウンダーがセンターポジションへと入り、図8のようなハーフコートの攻撃の基本的な形を作る。このように動くことによって、ボール運び、速攻、そしてハーフコートの攻撃へとスムーズに移行することが可能となる。この先は、パス&ランを基本として攻撃を継続していくことになる。

## 4.2. 新たな全体像の特徴

本論で今回提示した新たな攻撃の全体像の特徴を先の論文で紹介した側線のボール運び（図9～10）からの展開との比較をすることで、さらに明確にする。

まず、一番、大きな違いは、本論のやり方は、各五人にかなり明確な役割分担があることである。それに対して、側線のボール運びは、明確な役割が決まっていなく、自分たちがボール保持したら、とりあえず、サイドラインへ向かって走るということだけしか決まっていな。そのため、側線のボール運びは、ボール非保持者がとりあえず、サイドラインの方へ走れば良いという点で、つまり他に選択肢を作っていないという点で比較的単純であり、迷うことが少なくなる。逆に、今回提示したボール運びは、ボール運びをするガードのやるが多く、慣れを必要とする。つまり難易度があがることになる。それと同時に、ガード以外の人の負担が減る（走るだけで良くなる）ためにやり易くなる。このことは、チーム内で技量差が大きい時等に有効であり、多様な技量の人々が攻撃に参加できるということを意味する。しかしながら、技量の固定化を助長するとも捉えられる。つまり、このプレーだけをやっていけば良いという具合になりがちであり、教育的に問題があるとも考えられるが、このことは、役割を変えていくことによって、ある程度解消されると考える。

次に、今回のやり方のほうが、常にコートが広く使える。必ず、両サイドに人が走るようにしているため、常に同じような型が作りやすくなる。一方、側線のボール運びでは、片側に攻撃側の

人間が偏ることが多くなる。オープンスペース(人のいない場所)を明確にするという狙いもあるためである。しかし、これによって片側だけに人がより過ぎて、かえって迷いを生じさせることにもなりかねないのでその際の対処の仕方についてあらかじめ考慮しておく必要がある。

最後に、速攻がだめになった時のハーフコートオフェンスへの入りやすさについてである。ボール運びから、すぐに攻められる時は良いが(ファ

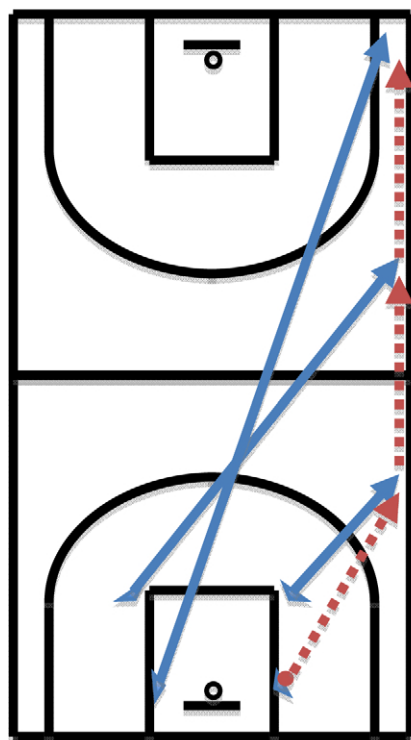


図9

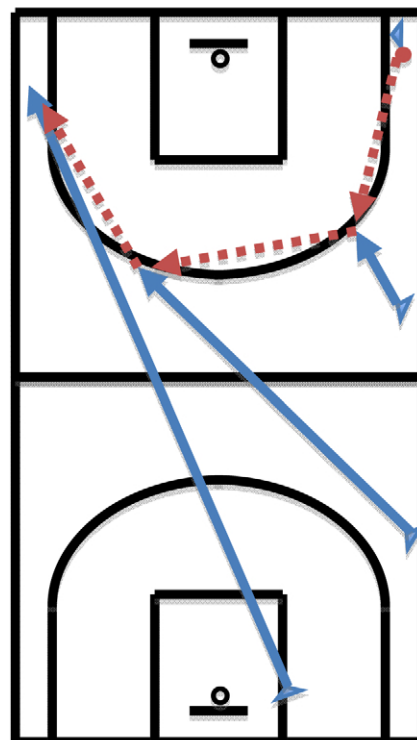


図10

ーストブレイク、セカンドブレイクで攻められる時)、速攻を止められ、ハーフコートオフェンスになった時に、今回紹介したボール運びの方がボールをコートの中を運ぶためにガードポジションにボールがあり、スムーズにハーフコートオフェンスに入りやすい。側線のボール運びを行うと、早い段階で攻撃が出来る時は良いが、そうではない時は、いったんボールをガードへ戻すことが必要になるため、ハーフコートオフェンスをきちんと始めることが難しくなる。

以上が側線のボール運びとの比較から出てくる特徴である。ボールを主として運ぼうとする場所と、何と言っても大きな違いは、役割分担の明確化である。

### 4.3. 新たな全体像の検証

今回提示した攻撃の全体像は、既に授業において実践をしている。筆者が担当している授業、球技A(バスケットボール)、実践研究C(球技系の指導法)で既に実施している。その時に、どのような点に注意したのか考察し、今回の攻撃の特性を更に明らかにする。その際、先の論文で使用したゲーム形式での問題点で触れた12の観点を今回のボール運びの型に当てはめ、再検討する形で論を進めたい。

1. 空動きをした後でも、何をすべきなのか迷い、結果として、動けない。
2. ボール保持者が、まずは、ドリブルから入る。
3. ボール保持者がパスコースがないと判断して、ドリブルをはじめてしまう。
4. ボール非保持者が、ボールを見てばかりで、走れなくなる。
5. ボール保持者が、ドリブルで動き出してから、ボール非保持者が動き出す。
6. ボール保持者が、誰かにパスをしてから、ボール非保持者が動き出す。
7. ボール非保持者が、自チームがボールを保持した瞬間にゴールに向かってまっすぐ走ってし



まう。

8. ボール保持者がドリブルでチームの先頭を走ってしまう。残りの4人が後からついていく形になる。
9. シュートチャンスが解らずに、シュートチャンスにシュートをしなくなる。
10. ボール保持者がドリブルでキープしながら、味方が動くのを待つ。特に、チームがバランスよくポジショニングをしている時に、このプレイをすること。
11. ボール非保持者が自分の動きを無駄だと思って動かなくなる。
12. パスが出せるからといっていつどのような状況でもパスを出してしまい、ボール非保持者の動きを止めてしまう。

1については、まずは空動きを徹底させることにつきる。側線のボール運びでは、個々人の役割分担がはっきりしていないので、特にこのことが問題となる。しかし、本論の型では、役割分担がはっきりしているのでこの問題は比較的解消される。しかし、サイドを先行して走る人がガードを信じてなかなか走り出せないという事態がおきる。

2については、授業場面で頻繁に起こる現象であり、多くの教員が頭を悩ませるところである。先の論文でも触れているが、バスケットボールの個人技術で、ドリブルは、最もやりやすい技術である。ボールを目の前に落とせば成立するため、体力的に劣っていてもパスやシュートと比較して誰でもすぐに出来る技術である。そのためドリブルが無意識にプレーの第一の選択肢になることが多い。このことの解消は、意図的に戦術的な側面を促進するために欠かせない。そのためにも、ボール運びをするときに選択肢の一番にパスを持ってくる必要がある。このような理由から教員の方から、パスを選択するようにしなければならない。そこでは、攻撃はこのようにやるものであるという強制力を持ってあたる必要がある。

3についても2と同様なことが言えるが、本当にパスが出せないのかを確認する必要がある。特に、今回の攻撃の型の中に、ガード同士のパスのやりとりで、リバウンドを取った人からパス（アウトサイドへのパス）を受けた後に、内側に走り込んでパスを受ける場面がある。これは、止まっている人へのパスではなく、動いている人へのパスで、困難度があがるために、パスを出せないことが多い。そのため、この状況のパス練習をする必要がある（スクエアパスという有名なドリルがある）。その前提の上で、実際のゲームでは、失敗しても良いから投げられそうだったらパスを投げさせるようにする。ボール運動において、大切な心構えの一つに、ベストなプレーでなければならぬということはないということです。つまり、最も悪いプレーでなければ、良いという考え方です。これは、学校教育の一つの問題点でもあるかもしれませんが、正確を求めようとすると、大変に難しくなりなかなか次へ進まなくなります。3のような事例は、正解を求めようとするあまり起きることが多いに考えられます。ボール運動を教える時の大切な要因であると考えます。

4についても、今回の攻撃の型の方がやりやすく、現出しにくいと考えます。先にも触れたように、役割分担が明確になっているということは、ボールがどこでパスをされるのかが比較的明確になっているためである。しかし、ボールを見てしまう人には、とりあえず自分が行くはずのコースへ走ることをアドバイスする。ガードは、サイドにしっかり開くこと、その後で自分自身を信じてボー

ルを受けるために走ること。大切なことは受けられる確証があつてから走るのではないこと。サイドを走る人は、まずサイドライン方向へ動き、目の前のオープンにしてコーナーへボールを見ずに走る。このように具体的に指示を出すことでボール非保持者の動きの基本を徹底させる。

5のように攻撃のスタートがボール保持者のドリブルが合図になってしまうことも大きな問題となる。2で指摘したことと同じように、パスを選択肢の一番にようにすること。そして、攻撃のスタートはボール保持した瞬間からであることを徹底させる。これは、バスケットボールを代表とする攻守混合型のボール運動の基本である。また、攻撃の全体像を型として提示するということは、このスタートをやり易くするという意味も含んでいる。

6も、誰かがプレーしてから動き出し、結果として動きが遅くなるという悪循環を生み出すプレーである。5で指摘したように、攻撃のスタートは、ボールを保持した瞬間であることを徹底させること。つまり、基本の徹底を図ることで解消する。

7については、全体の型を徹底させることが大切になる。特に、サイドを走るはずの人に、ゴールへまっすぐ走ると防御が多い場所を走ることになり、走りにくいことを認識させる。

8は、今回の攻撃の型については、少し異なる。ボール保持者の後ろにリバウンドとった人とガードにパスを出した人が後ろになることになる。そのため、ボール保持者の前に必ずしもたくさん的人がいるとは限らないが、しかし、コート縦に広く使用するという意味に置いても(図7を参照)、ボールの後ろから走り込んで来る人がいるという意味においてもボールの後ろに二人いることは重要である。一番大切なことは、ボール保持者が先行者(一番前)にならないことである。

9は、シュートチャンスがどこに来るのか、あらかじめ教えておくことが大切である。そして、その際に、3のところでも触れたような考え方に基づいて、シュートを失敗することよりも、打たないことの方が、良くないという考え方を教える。

10の状況は、ハーフコートオフenseの際によく起こることである。本論ではボール運びのところに着眼点を絞っているため、特に触れないが11と重複するのでそちらで触れる。

11については、全体の型を決めた時に典型的なボール非保持者の動きを示したが故の問題点である。全体の型は、典型的であると同時に一つの理想的な型を示していることになる。つまり、ベストの動き方を示し、それに近づこうとすると、それ以外の動きはだめな動きと捉え、負の連鎖が始まり動けなくなる。3で指摘した考え方に基づき、まずは動いてみることを、そして、動ききってみることが大切であることを強調する。そして、自分自身では無駄な動きと感ずいても結果的にチームに役に立つことを教えることが大切である。このことは、自分自身、もっと言えばプレーをしている人では、解らないことであるので、コートの外から見ている人、指導者が指摘し、勇気づけやらせる必要がある。

12は、ボールを出すタイミングと場所を明確にする必要がある。今回のボール運びについて言

えば、ガード同士のパス交換の場面である。このときに動いている人へのパスなので、思い切って前方にパスを出すことを心がけることで上手くいくことが多い。

#### 4.4. 良いプレーの典型例

今回のボール運びで、型通りに行けば、良いプレーになることは明白であるが、もう一つ良いプレーになるパターンがあるので紹介する。図11のように、最初にパスアウトを受けたガードから内側にボールを受けにきたガードに対して、ボールが入らないことがある。その際、内側に向かってドリブルをしてボールを運ぶ。ガードが動いた後にスペースが空くので、空いたスペースをドリブルで使うというパターンである。このパターンは、この攻撃の型を行うと頻繁に出現するため教えこむ、もしくは、空動きのパターンに入れ込むなどして当たり前のプレーにする。しかし、このパターンを覚えると、パスをしなくなる可能性が増える。つまり、このプレーの方が表面的なミスが減ることになる。しかし、バスケットボールでは、パスを出来るときにしないとパスをしないことがミスプレーになることが多い。そのため、第一番目の選択としてはパスをすべきであることを強調しなければならない。

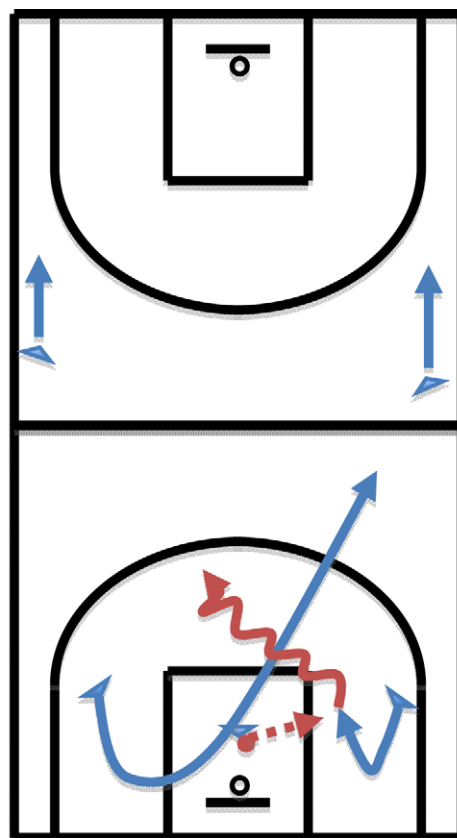


図11

#### 4.5. 側線のボール運びとの関わりについて

これまで、側線のボール運びとの違いから特徴をあぶり出し、検証していた。しかし、この二つのボール運びは全く別物で関わりがないというものではない。実は、今回紹介し、検証しているボール運びがバスケットボールのボール運びの基本的な形である。そして、先の論文で紹介した側線のボール運びは、基本形の三線を作るボール運びが崩れた時のオプションとして実施する典型的なボール運びである。

図12は、ボール運びをしようとして最初に内側にパスが出せなく、しかもドリブルできるスペースを見つけられずに困ったときの状況である。内側を横切った(スクエアカット)ガードがサイドラインまで走りきり、戻る動き(Vカット)して、もう一度ボールを受けに行く。そして、サイドラインを先行して走った人が戻る動きをしてボールをそれぞれにつなぐと側線のボール運びと同じ形になる。

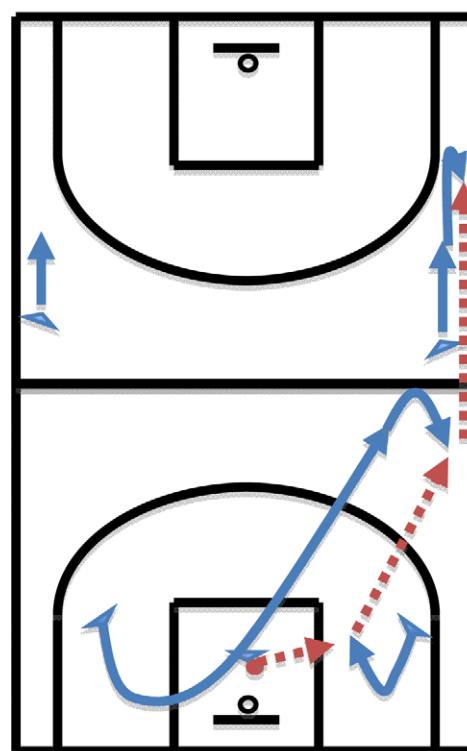


図12

このような関連を概観すると、最終的には、二つのやり方を学ぶことが大切になる。それによっ

て、場面によって臨機応変に対応する根底にも型があることを知り、ボール運動の戦術の意味を知ることになると考える。

## 5. まとめ

本論では、新たなバスケットボールにおける攻撃の全体像を提示し、検証した。これにより、様々な生徒たちに対応することが可能になったといえる。つまり、側線のボール運びからの型では、なじめないと感じる生徒にも、取り組み易くなると考えられる。同時に結果としてボール運びのところで2つのやり方を提示し、さらにその関連性に言及したことにより、ボール運びを初めとする戦術の多様性を深めることにもなると考える。そして、バスケットボールだけに限らず、ゴール型の球技のすべてに敷衍できるのではと考えている。

最後に、本論がゴール型（特にバスケットボール）の教えようとしている教員にとって手助けになればと考えます。

### 参考文献

バスケットボールにおける攻撃の全体像を示す指導法と運用 ～実践からの事例を元にして～（教育科学）

『埼玉大学紀要（教育学部）』第61巻 第2号 pp.15-26.

小学校学習指導要領解説 体育 平成20年6月

新学習指導要領 言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】 平成22年10月

2011～ バスケットボール競技規則（財）日本バスケットボール協会

バスケットボールの国際競技規則「Official Basketball Rule 2010」

## **A way of Teaching a Total Offence in Basketball 2**

**MATSUMOTO, Shin**

Faculty of Education, Saitama University

### **Abstract**

This essay purposed to show a sequel to “A way of total offence in basketball”.

That essay has been a total offence that has been carried a ball by sideline. It has been one motor form that amateurs play more easily. This has been another one that has been carried in the middle line of court. It has been another motor form that needed some players well. So, it would have explained the working knowledge of this. And it would have been considered on practice. Beside, it has confirmed difference and connection. By a natural process of this essay has helped teachers with basketball class in an elementary school.

**Key Words** : total offence, motor form, practice,